

ニッポン 病院の力 実



昭和大学歯科病院

舌や歯茎などの口の中に生じる「口腔がん」は、早期発見であれば90%以上の人は完治可能といわれている。ところが、国内での早期発見率はおよそ2割。がんの前段階の組織の変性は、口内炎と間違われるだけでなく、痛みを伴わないため放置されがちだという。

進行した口腔がんでは、手術に加えて、化学療法や放射線療法などを組み合わせた集学的治療が行われている。しかし、手術では、腫瘍の周辺組織も大きく切除しなければならず、歯や

歯茎、顎の骨などを失った患者は、そのままでは会話も食事もできないなどで、QOL（生活の質）の低下は免れない。

そんな口腔がんをいかに早期発見するか。そして、進行がんに対してどのようにアプローチし、患者のQOLを維持するか。この最先端の診断、治療、

こう話す同センター長の新谷悟教授（50）——顔写真——は、大学時代に祖母を舌がんで亡くしたことを機に、口腔がんへ立ち向かう決心をした。愛知県がんセンター頭頸部外科などで技術を学び、愛媛大学医学部歯科口腔外科時代には、新たな検査方法や傷口の小さな低侵襲の治療

月と同センターが開設されたのである。

新谷教授は顎や首の切開法にも、傷跡が目立たないようにこだわっている。一般的な手術では傷跡も大きく首の筋肉も傷つけられるため、術後にアゴがゆがんでしまいがちだが、それを回避する独自の手術法も開発し

「口腔がん」最先端技術を駆使し 患者の命とQOLを守るため最善を

再建を行っているのが、昭和大学歯科病院口腔がんセンターだ。

「進行した口腔がんは患者さんの食べる、あるいは、話すといった楽しみを奪うだけでなく、呼吸すらもできなくなることもあります。さらに命を奪われることもある。だからこそ、一般歯科医の先生方と協力して、早期発見に努めるだけでなく、あらゆる最先端の医療技術を駆使して、患者さんの命とQOLを守るために、最善のことにしたいのです」

法、さらには、再建方法などの研究を進めた。その手腕から2006年に現職となり、今年4

「現在、唾液によって早期がんを見つける早期診断法を研究

しています。また、治療では、口腔がんのリンパ節転移を見極めるため、乳がんなどで広く行われているセンチネルリンパ節生検の応用も行っていきます。そのため迅速診断法も確立しました。しかし、患者さんを守るためにまだやるべきことは多い」（新谷教授）

進行がんで顎の骨を切除した場合の新たな再建法も実施。切除した骨を温熱処理して、骨の中に潜むがん細胞を掃拭した上で、腸骨（ちようこうつ）から採取した組織を注入して骨を元の位置に戻し、顎の骨を再生させる。そんな新たな方法を次々と打ち出しているため、他の医療機関で治療を受けた人が、再建に訪れることも珍しくはない。

「何よりも大切なのは早期発見&早期治療です。欧米では国が口腔がん検診を勧めたことで、進行がんの患者さんが減少しました。日本でも何とかしたい。10年後には口腔がんの患者さんの8割は早期がんになればと思っています」と新谷教授。

口腔がんを完治できる人を増やすべく、今も尽力している。



〈データ〉2010年度実績
 ☆口腔外科手術総数439例（主な内訳）・悪性腫瘍59例・良性腫瘍34例・奇形／変形症133例・嚢胞45例・炎症37例・外傷21例・その他110例
 ☆病院病床数22床
 （住所）〒145-8515東京都大田区北千束2の1の1 ☎03・3787・1151

（安達純子）